



アカシア俳句会



令和六年 秋季俳句会 「句評」 秋の季語を含む作品一〜五句

一、「特選句」 選定句評

○終列車月夜鳥の大欠伸

藤井光正

◆視点の新しさにびっくりしました 夢か 現か 幻か このカラスは日本サッカーの守護神の三本足だったのでは 中野亘子

○毬(イガ)残しお猿の宴栗拾い

戸堂博之

◆人間の行儀の悪い栗拾いをお猿の仕業に喩えたところが秀逸だと感じました 大人の余裕を感じる句です 藤井光正

○昨日芋今日はカボチャの時代あり

佐藤茂弘

◆共通の思い出を共に語る友も だんだんすくなくなりました 吉澤志保子
◆大阪市内にいたときはそれすらなかった 高石に疎開してやつとお百姓から父が手に入られてやつと飢えをしのげた 戦争は嫌だ 戸堂博之

○植木鉢返す手元を秋の風

加龍恵子

◆季節の終わりがわかる何気ない仕草に秋風 何気ない光景の中に様々な感情が浮かんできます 野本展子

○秋気澄み始発ふみきり電車音

加龍恵子

◆町にも早朝の秋の空気の冷たさが伝わる句 都 福仁
◆早朝は離れていても駅のマイク音 レールのきしむ音は聞こえます 「秋気澄み」でこの様子がよく感じられます 佐藤茂弘

○初雪の富士の嶺(ね) 迫る機窓かな

中野亘子

◆東京大阪間の飛行コースでは スレスレの感じで富士の上を飛びます それが初雪ならばどんなに美しいことか 山家由紀

○蟪蛄の気取って歩く門扉かな

中野亘子

◆表舞台で気高く振る舞うジェントルマン 蟪蛄の振る舞いがコミカルで楽しさが伝わってきます 前田秀一

○故郷の柿法張りて笑う母

野本展子

◆年を取れば一層故郷が懐かしい その故郷の柿をほおばるお母さんの嬉しそうな顔が見えるようです 加龍恵子



○散りてなほ地上の錦濡れ紅葉

前田秀一

◆大地に還った紅葉が雨にぬれても なお 美しさを醸し出す万物流転の情景がよく歌われていていると思えました

元永悦子

○秋句会十年（ととせ）の巡りなほ深し 前田秀一

◆ととせ のひびきが心地よく 秋の深まりと月日の重みがよく伝わってきました

吉田以登

二、「編集後記」

三丘同窓会のご理解と後輩諸氏の進取の心意気により土生重次 ↓ 小川誠二郎 ↓ 中野陽典と先師から繋いで参りました三丘七期生の俳句会(金剛俳句会) ↓ アカシア俳句会)の心を「ミクニハイク」として発展的に引継いでいただくことになりました(設立広報:「三丘会報」七十七号、2024年5月31日発行)。

この経緯を踏まえ、アカシア俳句会は、令和六年「秋季俳句会」をもちまして活動を終了しました。十一年にわたる会員およびご家族の皆様のひたむきな創作意欲と評論の博識に敬意を表します。今後とも、「ミクニハイク」を三丘同窓会の文化交流の場「三丘文芸」としてお育ていただきますよう、後輩諸氏に託します。



「金剛俳句会」(2013~2020年)から「アカシア俳句会」(創立)へ!



「ミクニハイク」へのアクセスは、Google（グーグル）などの検索エンジンに「ミクニハイク」と入力しクリックしていただくことにより、「第一回ミクニハイク結果発表」および今後の投句応募要項など確認できます。

なお、アカシア俳句会の作品集および会員交流の「場」（会員情報交換）は、これまでどおり検索エンジンに「アカシア俳句会」と入力しクリックしていただくことにより閲覧いただけます。

「土生重次師俳句論」（**）

**：小川誠二郎編二〇〇一『抄録・重次俳句論―土生重次、かく語りき』（復刻）扉会運営委員会

《今回の学び》

「俳句は哀しみの文芸である」

八十三頁

俳句は人間諷詠の詩である。自然や季語に託して人間を詠う詩である。そのためには、自分自身に感動というインパクトを与えること。

俳句は歓びの文芸ではなく底に流れているものは哀しみの文芸だと思う。俳句は「生きている証」といわれるが、これは自分で声高にいうものではない。自分の呟いているような作品を、誰かが「証し」ですね、と言ってくれば以って瞑すべきもの。構えて「生きている証」など作り出せるものではない。ささやかな呟きの集積が、結果として「生きている証」になるのだ。

「哀^{あわれ}」とは「ものに感動して発する声。嘆賞・親愛・同情・悲哀などのしみじみした感動を表す。」と辞書にある。これを「哀^{あい}」と読めば「あわれむこと。かわいそうなこと。」である。どうもこの二つが混同されているようだ。

俳句は、前者の「哀^{あわれ}」の文芸であると思う。「もの」と「こと」がら「への感動がもとにあることは勿論であるが、この「哀」は「ああ我^{われ}」でもあるのだ。あらゆるものに自分と同一性を発見し、それを詠出するのが俳句だと思う。「お前もそうだったのか」と共鳴する「こと」である。

魚桶を攀^{よじ}る蟹より売られゆく

安藤馬城生

一読して、ユーモアの奥深いところに、一抹の哀しみの流れているのを感じた。「蟹」が「魚桶」から逃れんとして必死になってよじのぼっている。皮肉なことに、その無駄なあがきを先頭に立ってしているものから売られてゆくのだ。

作者は「蟹」の単なる動作を見ているだけではなく、人間の営みとかさね合わせているように思えるのだ。鋭い観察力により、実態をわれわれの眼前にひろげてくれるとともに、ものの「実質」を感じさせてくれるのである。それが詩である。

どこかいいところに飛んで行きたい。飛んで行く先はきつといい土といい水のあるところ。そこに芽を出したいと漂っている草の絮である。そこに連れて行ってくれると信じていい風だ。だが風は海に行く。風は草の絮のために吹いているのではない。でも草の絮は風を信じている。私を捉えて離さない一句である。

引鶴や北帰一途の風測る

福江幸夫

一読して懸命に生きる鳥の心を思った。あの優美な姿の鳥が何故遠い北方の地に帰っていかねばならないのだろうか。ひたすら己の二つの羽根を信じて、外敵や、それよりも恐ろしい天候の変化に耐えながら長途の旅を繰り返す。それは鶴が生きていくための宿命なのであろう。しかし私にはそれで割り切れない思いが残る。北海道釧路には、一年中丹頂鶴の生息する大湿原があり、そこで営巣する。そんな鶴もいればまた帰っていくものものもある。吾々もいずれどこかへは帰っていくにしても、毎年繰り返される鶴の行動は哀しい。

掲出句の作者も同じ思いではなかったか。「風測る」にその思いを読みとれるのである。自分が乗るべき風を待っているのか。あるいは帰るに適した風向きを探っているのか、やや緊張したような鶴の一瞬の姿を捉えて秀抜である。

「北帰一途の」という漢語調の表現が、その緊張感を増幅している。言葉の密度の濃さがもたらしたものである。だからだと説明していない勁さといってもいいだろう。言葉の密度の濃さがもたらした

絵画的な句でありながら、裏面から生きるものの逞しさと、哀しみを立ち昇らせていることを味わいたい作品である。

《これまでの学び》

既発行『句評』『編集後記』掲載

◇「俳句は叙事詩である」 季語―非凡の一節を支えるもの

令和五年『冬季・新年俳句会』

◇「俳句はモノに託して心を詠う文芸である」

令和四年『秋季俳句会』

◇「俳句は『心』や『情』を直接的に詠ってはならない」

令和四年『秋季俳句会』

◇「俳句は『今』をとらえた文芸である」

令和五年『春季俳句会』

◇「俳句は『何を詠うか』ではなく、『いかに詠うか』だ」

令和五年『春季俳句会』

◇「俳句は感動を詠う詩である」

令和五年『夏季俳句会』

◇「俳句は自然と人間との関わりを詠う詩である」

令和五年『夏季俳句会』

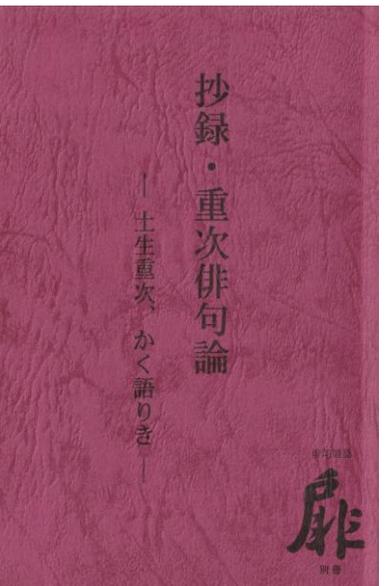
◇「俳句は『坐五』(*)がいのち」 *：「坐五」下(しも)五文字 令和五年『秋季俳句会』

◇「俳句は描写ですよ!」 令和六年『冬季・新年俳句会』

◇「言葉はやさしく、思いは深く」 令和六年『春季俳句会』

◇「俳句は映像の交換です」
イメージ 令和六年『夏季俳句会』

◇「俳句は哀しみの文芸である」 令和六年『秋季俳句会』



摘要

○この語録は、「扉」主宰の土生重次が、自己の俳句理念と作句上の心得を扉誌や句集等を通して説かれたものの中から採録した。

○採録したのは、「扉」誌(創刊準備号から平成十一年十二月号まで)、扉誌に先立つ「冬生」、会員の勉強会「果箱の会」の会報、会員の句集へ寄せた序文、及び句集あとがき、主要俳誌、他結社誌等に発表したものである。

○文末に引用書と発表年月を付した。書名のないものは、「扉」誌からの引用であり、一滴は選後一滴、後記は編集後記の略である。

構成・文責 磯村光生

扉 平成十三年六月号(創刊十周年記念号) 抜粋	抄録・重次俳句論(復刻)
平成十四年八月八日発行	絶版
発行人 扉俳句会運営委員会	代表 柏原昭治
編集人 小川誠二郎	編集部(連絡所) 〒116-0001 東京都荒川区町屋一三八一-六 株式会社リョーイン内 扉編集部 電話 〇三三八〇九-二一五 株式会社 リョーイン
印刷・製本 六冊以上とまれば 八〇〇円	定価 一冊送料共七〇〇円
払込口座 扉俳句会 〇〇二九〇-二二七二九	重次俳句論(四冊)明記していただく

あとがき

土生重次(はぶ・じゅうじ、本名 はぶ・しげつぐ、昭和十年六月十三日生まれ)先生は、平成三年五月創刊準備号、同六月創刊号の俳誌「扉」を以て扉俳句会を興し、主宰されました。

その後先生が病気になるため、平成十二年一月号より、扉俳句会運営委員会が「扉」誌を発行し、平成十三年六月号を創刊十周年記念号としました。

先生が十周年をまだず平成十三年三月二十二日、逝去されましたことは、痛恨の極みでありました。

その創刊十周年記念号に掲載されたのがこの本の「抄録・重次俳句論」で、これは磯村光生さんの御尽力により編まれたものです。

先生は、「俳句を教えたくなったから俳句会を興し、主宰になっ

た」「私は俳句作りの職人だ」と常々言われていましたが、たしかに、教えることに熱心な先生でした。そして、自分の持っているものをさらけ出して指導されました。その指導は具体的で判りやすいものでした。

そのため、先生の俳句は、骨格がはっきりしていて、継承して行くことが可能なものと思います。この「抄録・重次俳句論」はそのよりどころになるものと思います。もちろん、先生がご存命で指導されるようには望むべくもありませんが、扉衆相寄り、俳縁を大事にし、心と力を合わせ、扉俳句と扉俳句会を発展させたいものです。

「抄録・重次俳句論」をこの本の形にまとめるのは、吉田克己さんのご提案によるものです。

(誠)
小川誠二郎

編集人 前田秀一